天平感宝元年閏五月六日より以来、小旱を起こし、百姓の田畝稍くに凋む色あり。六月朔日に至りて、忽ちに雨雲の気を見る。よりて作る雲の歌一首　短歌一絶

四一二二番

天皇の　敷きます国の　天の下　四方の道には　馬の爪　い尽くす極み　舟舳の　い泊つるまでに　古よ　今の現に　万調　奉るつかさと　作りたる　その生業を　雨降らず　日の重なれば　植ゑし田も蒔きし畑も　朝ごとに　凋み枯れ行く　そを見れば　心を痛み　みどり子の　乳乞ふがごとく　天つ水　仰ぎてそ待つ　あしひきの　山のたをりに　この見ゆる　天の白雲　海神の　沖つ宮辺に　立ち渡りとの雲りあひて　雨も賜はね

反歌一首

四一二三番

この見ゆる　雲ほびこりて　との曇り　雨も降らぬか　心足らひに

雨落るを賀く歌一首

四一二四番

我が欲りし　雨は降り来ぬ　かくしあらば　言挙げせずとも　稔は栄えむ